

知るということ

新温泉町立夢が丘中学校 3年 川元 桃花

「なぜ、人権侵害やいじめがなくなるのだろうか」。毎年、人権作文を書くときに私の頭に浮かぶ疑問です。学校では、先生がいじめについての話や、人権の授業をしてくださいます。地域では、人権講演会が開かれ、多くの方が参加されています。その中で私たちは、人権を尊重することの大切さや、命の尊さについて学びます。それでも、人権侵害やいじめが社会からなくなることはありません。なぜだろう…

そんなことを考えているとき、私はあるテレビ番組の特集を見ました。私はその内容を知って、涙が止まりませんでした。二人の元ハンセン病患者の方が病気にかかってからの人生を語るというものでした。その話は、私の想像を絶するものだったのです。

ハンセン病は、「らい菌」という細菌に感染してかかる病気です。「らい菌」は元々感染力が弱く、たとえ感染したとしても発病する力はとても弱い細菌です。特効薬もあり、完治する病気です。治療をせずに放置すると、身体の変形を引き起こし、障がいが残ったりする恐れもありますが、初期に治療を開始すれば、障がいは残らないそうです。しかし、昭和四年に「無らい県運動」を各都道府県が行い、ハンセン病患者ゼロ人を目指して、競うように患者を療養所に入所させました。昭和六年には「らい予防法」が成立し、在宅のハンセン病患者も強制的に療養所へ入所させることができるようになりました。このような国の動きから、ハンセン病が「恐ろしい伝染病」だという認識が社会に定着することになりました。それ以降、ハンセン病患者は差別や偏見に苦しむこととなります。

元ハンセン病の方の話の中に「社会を守ることが暴走する危うさ」という言葉が出てきました。ハンセン病患者が結婚する際には、条件として、二人のうちどちらかが不妊手術をするように迫られたそうです。ハンセン病にかかった子どもを産まないようにするためです。現代では、ハンセン病は感染症なので、遺伝することはないと分かっています。しかし、そのことがはっきりと分かる前は、ハンセン病患者を増やさないために、この方法がとられたと考えられます。しかし、生まれた限り、自分の子どもを残したいと思うことは当たり前のことです。これは、誰もが平等にある権利で、病気が理由でその権利を奪うことは、大変な人権侵害だと思いました。そもそも結婚を

許されなかったり、進学や就職を拒まれたりすることも多くあったそうです。これらの差別は、病気が完治した後も続けられました。また、ハンセン病患者の家族も、結婚や進学、就職において差別にあったそうです。病気にかかっただけで、自分も家族も当たり前の生活ができない、人として大切に扱われないというのは納得がいきません。

もう一方の元ハンセン病患者の方は、「怖いのは社会の空気」と話しておられました。ハンセン病患者は、療養所に入るときに、自分の名前を変え、籍を抜きます。これは、家族に差別や偏見の目が向かないようにするためだったそうです。家族のために、自分の存在を消してしまうのです。家族と縁を絶ち、療養所で一生を暮らす生活がどれほど過酷だったのでしょうか。社会の間違った政策が差別を引き起こし、それが間違いであったと分かった後も、家族のもとに帰れず、人々の偏見に苦しんで療養所で亡くなっていった人々のことを思うと胸が痛くなりました。

ハンセン病患者を苦しめたのは、病気そのものよりも、世間だと私は思います。ハンセン病患者の方々のように、社会から間違った受け止め方をされ、差別を受けている人は他にもいるのではないかと思いました。もちろん、政府やマスコミから流された情報は、本当だと信じてしまうと思います。でも、当事者の話を聞き、真実を正しく知る、誤った認識を持っていたら、その間違いに気づき、その認識を改めることが差別をなくすことに繋がると私は思います。自分の情報や認識が正確なものなのか、自分の行動が人を傷つけていないのか、一人ひとり見つめ直してみる必要があると思います。

私自身も多くのことを学び、様々な角度から正しく知ることで、人権が尊重される世の中を作る一人として成長していきたいです。